

誇り

—差別といじめは越えられる—

震災後福島を襲った風評被害という名の差別といじめ
だが、それは福島だけの問題ではない！



「福島は私たちの町なんです。どんなに大変なことになっても、
私たちには、ひとつしかない私たちの町なんです」

「わかってもらおうとすることが大事なんだ。
互いのことをもっと知ろうとすることが大切なんだ。
自分に、自分たちに誇りを持つことから始めるんだ…。
ほくらは、いまそう思っている」

上映時間30分 [C#7499]

DVD 69,300円(本体66,000円)

※消費税の変動により販売価格は変更の可能性があります。



東映株式会社 教育映像部

〒104-8108 東京都中央区銀座3-2-17

<http://www.toei.co.jp/edu/>

企画 意図

震災と津波…。そして更に原発事故と風評被害が福島県を襲いました。いまでも福島県は試練の中を生きています。それは、風評被害という名の差別や偏見、いじめだともいえます。情報に振りまわされ、真実を見ない…。その姿は、差別や偏見を生み出す人々の心のしくみを象徴しています。本作品は、福島県の人々が経験した事実をもとに、差別やいじめを考えるものです。

内容

震災から一月半後。原発事故の子どもへの影響を心配して、鈴木匡夫と八重子の夫婦は、長男の匡弘、長女のゆかりと共に、匡夫の実家のある町へ引っ越してきた。そこには、避難住民をサポートするNPO法人の佐々木幸子のようなボランティアがいる一方で、親戚や周囲の冷たい眼もあった…。



学校でいじめに遭ってしまう、ゆかり。父親が原発関係の下請け会社に勤めていることをなじられ、暴力をふるってしまう匡弘…。やり場のない思いが家族を襲う。

ある日家族は、匡弘たち家族がいる町に出店している福島の人たちと出会う。そこには、いまでも福島で生活し、叔父の店を手伝いにきていた、匡弘の同級生、佐藤広美の姿が…



「私さ。前よりずっと福島のこと、好きになった。震災と原発事故で大変なことになって、自分の生まれた町や町の人のが、ものすごく大事になった…」 「福島に生まれてよかったって、いまは誇りに思ってる」。



広美の言葉にはっとなる匡弘。風評被害を乗り越えようと町行く人たちに声をかける出店の人たち…。その姿に、家族は忘れかけていた、福島への誇りに目覚めていく。

家族は、再びふるさとで暮らすために、明日のための今日を精一杯生きていこうと決意していく。

※本作品の収益の一部は、震災後から福島県支援を実施する特定非営利活動法人 Social Net Project MOVE (<http://www.movejapan.org>)の支援事業に活用されます。